出会い　ふれあい　助け合い

サロン・あべの

<サロン・あべの>NO．34　　平成　元年　4月15日（土）発行

サロン・あべのこの一年

＜サロン・あべの＞三月の出会い

暖冬と云われ続けて、桜の開花宣言が駆け足で北上して来た平成元年三月一八日（土）午後一時～四時、育徳コミュニティーセンター二階研修室に於て、「サロン・あべの　この一年をふりかえって」と題し＜サロン・あべの＞の出会いをもった。

＜サロン・あべの＞は、この三月で丸三年を終える。障害者と健常者との出会いの場作りをして、障害者への理解と地域参加を促進していきたいとの希望から発足し、月一回の集いを開催、サロン紙の発行をしてきた。最初は、手探り状態のサロン運営であったが、回を重ねると共に、参加者や協力者も増え多くの人達との出会いと交流が拡がってきた。それにつれて、サロン運営も順調に運び、種々の企画を試みることが出来るようになってきた。

昭和六三年度をふりかえってみると

＊研修会では「地域福祉・育て草の根」「ストレスてなんやろ…」

＊見学会では「リバティ・おおさか＝人権資料館」

＊交流会では「みんなで集う交流会ー長居公園へ出かけよう！」「たくさんの愛をありがとうー阿倍野区ボランティア交流会」

＊お互いに話合い学び合う学習会では「私のストレス解消法」「住いの工夫　あれこれ」

＊講演会では「私の歩いてきた道」

＊親睦会では「ときめきのクリスマス」「わくわく新年会」

＊運営資金調達の一助と地域参加としての「あべのカーニバル　バザー出店」

等々、多くの出会いをもってきた。

これらの出会いを通して得られた事柄や感想は、個人それぞれによって異なっていることとは思うが、そこに障害者がいて、健常者がいたという構図はいつの場合でも変わらなかった。この基本が崩れないで、サロンの集いを開催することが出来たことは、＜サロン・あべの＞の意味を見付け出

して下さる人達が多くいることの証しと感謝し、運営委員にとって大きな喜びであり力ともなっている。今後も初心を忘れず、様々なテーマのもとに、共に考え体験していけるように、そこからお互いの理解と認識が生れてくるように、毎月のサロンの出会いを魅力ある場にしていきたいと考えつつ、この一年をふりかえった。（下段に昨年度の活動表）

この後、参加者の方々より、ボランティア活動の難しさ、ボランティアの方々との

'88 おもな出来事

昭和六三年

四・一二 ★「地域福祉・育て草の根」
誰もが住みよい街造り・地域づくりについて、西　勝彦氏に話を聞く。

五・二一 ★「ストレスて、なんやろ・・・」
ストレスの実体について北田伸彦氏（久米田病院心理担当検査技師）に話を聞く。

六・一八 ★「私のストレス解消法」
大島功・斉藤孝文両氏に障害から来るストレスとその解消法を聞き、参加者と一緒にお互いの解消法について話し合う。

七・一六 ★「住いの工夫　あれこれ」
商品化された建物や品物でなく、それぞれが自分に合うように考え、作った住いや道具について話し合う。

八・二八 ★「あべのカーニバル」
第15回あべのカーニバル「なんでも市」にバザー店として参加。3回目でもあり、なじみも増えて出会い・ふれあい盛況となる。

九・一七 ★「私の歩いてきた道」
肢体障害者の秋野富美子さんに、聴言障害者の夫との出会いとその後の生活について話を聞く。

交流について話合いをした。
「最初は余暇を有効に使いたいと始めたボランティアであったが、段々と深入りして仕事や自分の生活等との両立が難しくなり、精神的負担が大きくなってきた。」
「ボランティア活動は、拡大していきやすが、縮小は難しい。」
「個人的な付き合いが深くなってくると、都合が悪い時でも、ボランティア要請を断りずらくなってくる。」
「ボランティアは、対象者の為にやってあげるものではなく、自分の為にさしていただく気持が大切。でも、無理は禁物。長続きしない。自分のペースを守ること。」
「『ボランティア』という言葉より、なにげなく手助け出来る姿勢が大切。」
「体力的な援助だけがボランティア活動ではない。」
「やってみたいボランティア活動が時間的なこともあり、なかなか見付からない。」
障害者の立場からは、肢体障害者や視力障害者は介助や手引等でボランティアとのお付き合いが多いが、聴言障害者は日常生活においては、あまり関わりがなく、特別な時だけに手話通訳者を探すとのこと。

九・二二 ★府社会福祉協議会「福祉広報紙コンクール受賞式」
森の宮青少年ホールに於て＜サロン・あべの＞紙は昨年に引き続いて「優良賞」を受賞する。

一〇・二九 ★「みんなで集う交流会――長居公園へ出かけよう！」
ボランティアスクールの受講生・一般のボランティアの方・たんぽぽ作業所の仲間達・老人福祉センター、デイケアサービス参加者・在宅老人の方々と共に、晩秋の自然に親しみピクニック気分を楽しむ。

一一・一二 ★「たくさんの愛を　ありがとう」
阿倍野区民ホールに於て「第三回阿倍野区ボランティア交流会――あなたの愛を地域福祉に」が開催され、映画「たくさんの愛をありがとう」を観賞した。その後「友愛・老人」「身障者問題」「給食サービス」「ボランティアの悩み」「自由課題」等々のグループ別に分かれて話し合いを持った。

一二・三 ★「ときめきのクリスマス」
ゲーム・ゼスチャー・クイズ・手話コーラス等々で、参加者一同ちょっと早めのクリスマスを楽しんだ。

一二・一四 ★「ボランティア活動促進事業」の助成金交付を受ける。
大阪市社会福祉協議会「大阪市ボランティア活動振興基金」の助成金を受け取る。

平成元年
一・二一 ★「わくわく　新年会」
あべのベルタ地下二階の「龍鳳」で、中華料理を味わいながら新年の抱負を語り合い、親睦を深めた。

二・一八 ★「職人生活と第五福竜丸」展
ＪＲ芦原橋駅近くにある「リバティ・おおさか＝大阪人権資料館」へリフトバスを利用して見学に行く。

三・一八 ★「サロン・あべの　この一年をふりかえって」
＜サロン・あべの＞の一年間の出会いを振り返り、ボランティア活動やボランティア方との出会いについて話し合った。

あべのボランティア・ビューローのコーディネーターである前田博子さんからは、「ボランティア要請を満たすだけでなく、ボランティア志望の要求をも満たしていけるよう考えていきたい。又、ビューローは、ボランティアに関する相談や悩みを聴くところでもあるので、いつでも利用してほしい」と心強い助言があった。又、植松氏は、手話通訳のビデオを撮るために参加下してさった。

この日の参加は、一八名。司会・冨田慶子さん。

＜サロン・あべの＞に参加して

キリスト短期大学
ボランティアグループ
徳山　万千子

三月の＜サロン・あべの＞の集いに初めて参加して、身体障害者の人々が、積極的にコミュニケーションをとる姿に心を打たれました。皆さんの積極性、ストレートさに感心しました。私自身、学ぶことが多いひとときでした。

まちづくりのはなし（3）

第二話　はっとする風景

原田　仁

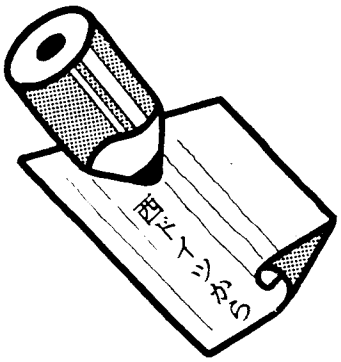
先日仕事で東京へ行ってきました。新幹線っていうのは僕にとっては格好の昼寝の時間なのでいつもあまり覚えてないのですが、そのときはたまたま本かなにか読んでて、ふっと目を上げると目の前に富士山がドーン。あまりのすごさに一〇分程は声が出ませんでした。（もっとも新幹線でひとりで騒いでいる人もいませんが）

このあたりに住んでいる人はなんて幸せなんだろう。いつもこんな富士山が見られるなんて。毎日見てたって絶対飽きることなんかないなって、とてもうらやましく思いました。

大阪に引っ越してくる前、京都の長岡京というところに住んでいました。そこで何ということはない普通の住宅街の通りなんだけど、ある晩秋の朝にいつものように角を曲がると、落葉の舞う街路樹が、まるでヨーロッパかどこかの写真でも見ているようで、立ち止まってしまったことがありました。それまでは全然気づかなかったのにそれからはその通りを通るのがなんとなく楽しみになったんです。

富士山はやっぱり一つしかないから日本一なわけですが、素敵な通り、気に入った場所はあべのにもたくさんあります。

そんなところを見つけるたびにこの街が好きになる、そしてその風景を作っているこの街の人たちもすてきな人に違いない、そう思うんです。



冨田さんへ

お手紙ありがとうございました。あなたのことを何か伺うのはうれしいことです。クリスマスにはお便りできなくてすいませんでした。しかし、わたしは治癒のため、セント・ヴェンデルの特別病院に入院していました。ここはわたしが治療を受けたところです。セント・ヴェンデルはドイツのべつの地域の小さな町です。おおくのひとがこのクリニックで休暇を過ごしました。わたしはフルセラピープログラムを受けました。体操とか、手への療法とか、入浴とかです。わたしはそこにおよそ７週間いて、治療はわたしの健康にとって効果がありましたが、先週、ころんで足に怪我をしました。それで、わたしは数日歩けませんでした。

今は先週から家にいて、また、日常生活に慣れなくてはなりません。わたしはセルフヘルプグループについて十分お話しすることができません。クリスマスパーティもありましたが、わたしは参加できませんでした。けれども、それについては情報を入手して、次の手紙に書くようにしますね。わたしたちは、このつぎは１９８９年１月２４日に会います。そのとき、グループメンバーがわたしたちの活動のフィルムを作ります。このフィルムは１９８９年７月ベルリンの大会で公開される予定です。しかし、制作には多くの問題があります。

ウナにはまだ雪が降っていません。今年はいつになく暖かいです。

クリスマスには岡さんもお便りをかいてくださり、とてもびっくりしましたし、うれしく思いました。もし、お会いになりましたら宜しくお伝えください。また糀谷終一さんにも。

お元気で、またお返事くださいますように。

ごきげんよう。

ブリジッテ・エーヘンベルグより

Brigitte Ehrenberg
Duererstr. 1
4750 Unna /West Germany / 10.01.89

Keiko Tomita
3-26, Hannan-cho 6chome
Abeno-ku, Osaka City
545 Japan

Dear Ms. Tomita,

thank you very much for your letter, I am happy to hear something of you. I am sorry that I haven't written to you at Christmas, but I was in a special hospital for recovery in ST. WENDEL, where I made a cure. ST. WENDEL is a little town in another part of Germany. A lot of people spend their holiday in this clinic, but I had a full therapy-program: gymnastics, therapy for my hand, some baths and so on. I was there for nearly 7 weeks and the cure was effective for my health, but in the last week I fell down and injured my foot, so that I couldn't walk for some days.

Now I am at home since last week and I must accustome again to daily life.

I couldn't tell you very much about the self-help-group. We had a Christmas-party, too, but Icouldn't participate. But I will try to get some information about it and will write it in the next letter. We'll meet on 24th January '89 next time. In the moment the group-members produce a film about their activities. This film will be showed on a congress in BERLIN in July '89. But there are many problems with the production.

We've no snow in UNNA, it is unusually warm this year.

I am very surprised and enjoyed that Mr. Oka has also written to me at Christmas. Please send good wishes to him, if you see him! Also to Mr. Syuichi-Kojitani!

I hope you feel well and can write me back in the next time

With the best wishes

Brigitte Ehrenberg

罪を担うこと

先週ぼくは北京の街を、ひとりの中国人女性と歩いていた。去年の暮れ、今度会うときには、この街を案内してあげるという約束を彼女は覚えてくれていたのである。

お互い慣れない英語で話していたが、彼女は、それでも日本語を少し知っていると言った。どんな日本語かたずねると、それは『メシメシ』と『スパスパ』というものだった。私が知っているのは、この二つの言葉だけよと笑っていた。

『何？　それ、どういう意味？』とぼくがたずねると、彼女は、中国人なら子供でも知っていて、路地などで『日本人ごっこ』をするときには、きまって『メシメシ』『スパスパ』と言いあうのだと教えてくれた。『メシメシ』というのは、そういって食べ物を奪って鶏などを頭から食べる真似をする。『スパスパ』というのは、抵抗する相手の首を刀で切るときに言う言葉だという。子供たちは、『メシメシ』といって食べ物を取り合い、逆らうと『スパスパ』と言って相手の首を切る真似をして遊ぶ。それが『日本人ごっこ』なのだ。

彼女は笑っていたが、ぼくはどうにも笑う気にはなれなかった。ぼくたちは、そういうことを中国の人たちにしてきたのだ。

そういえば、北京に行く前日、ぼくは元日本兵の次のような告白文を読んでいた。

『私は二日前から一八歳ぐらいの中国の娘を連行させていた。毎日自分の慰みものにしていたのだが、いずれは何とか「処理」しなければならぬことは分かっていた。このまま殺してはつまらない。私は一つの考えを思いつき、それを実行した。私は娘を裸にして強姦し、その後、包丁で刺し殺し、手早く肉を全部切り取った。それを動物の肉のように見せかけて盛り上げ、指揮班を通じて全員に配給したのである。兵隊たちは人間の肉とも知らずに、久し振りの肉の配給を喜び、携行していた油で各小隊ごとに、揚げたり焼いたりして食べた。（中国帰還者連絡会編『私たちは中国でなにをしたか』三一書房より）』

ぼくは、五〇年前この地に来ていたら、この人の肉を『喰わされて』いたかもしれないと思った。なんということだ。人間にそんなことができるのだろうか。

実はぼくは、自分の母からも聞いていたのだ。母が子供のころ親戚のある男を訪ねたとき、彼は中国人の家を襲ったときの話をした。彼がある家に押し入ったとき、老夫婦は娘をふとんのなかに隠した。彼女はコタツのように見えるようにうずくまっていたという。日本兵は若い女性がいないかと捜していたのだが、どうしても見つからない。ふと見ると『コタツ』がぶるぶると小刻みに震えていることに、彼は気がついた。『それ、こんなところに隠れていた』と、ふとんを剥いでやったんだと、大声で笑いながら母に話したという。その子は、その後、何十人もの男どもに襲われ殺されたのだろう。母は、その話を聞くと恐ろし

くて身体がぶるぶる震えたという。

ああ、その男が、ぼくとどのような血縁にあるのか、ぼくは母に聞いてみたいとも思わない。ぼくの身体のなかに、そのような恐ろしい血が流れているとは信じたくない。しかし、それはごまかしようのない事実だなのだ。一部の異常な日本兵たちだけが、そのようなことをしたのではない。ごくあたりまえの男たちがそういうことをしてきたのだ。

ぼくは、なぜこの世に『幽霊』なるものが存在しないのだろうと、とても口惜しく思う。この世にかぎりのない『怨み』と『呪い』を残して死んでいった人は、なぜ『怨霊』となって復讐できないのか。なぜ死んだ人の魂はこうも無力なのか。ふとんを剥ぎ、震え泣きさけぶ娘を殺した人間が、なぜ、孫をひざに抱いて平穏な一日をおくる老後を迎えることができるのか。いったいなぜなのだろう。

連日強姦され、生き地獄を味わった末に肉を剥がれ、何十人の人に喰われた中国の娘の『魂』はどうなったのだろう。この子にとって『生きた』ことは何だったのだろう。この子の果てしのない『怨念』や『呪い』はどこに行ったのだろう。それば、小さな野花の毒のように、雨に流され消えてしまったのだろうか。

いや、そうは思わない。北京の街を歩いていると、ぼくは殺された娘の『怨み』がそっと物陰から、ぼくを見ているのがわかる。強くはないが、容赦のない『呪い』の声が聞こえてくるような気がする。

この殺された娘たちの『怨み』のために、日本は経済的には世界でも第一の豊かな国になったが、決して尊敬される国にはなれない。最も強い経済力をもっても、断じて世界を指導していく国にはなるはずがないのだ。

中国や韓国では、ぼくたちはどんなに笑顔で歩いていても、愛国者を拷問にした兵隊の息子であり、母や娘を強姦して殺した暴漢の息子なのである。彼等は誰もそれを忘れてはいない。

罪は、つぐなわれなければ、いつまでも残る。それを『侵略戦争ではなかった』『虐殺はなかった』と、ぼくたちの政治の代表者が言うのなら、罪はぼくたち自身が担わなければならない。なぜならぼくたちは『日本人』だからだ。富や力によって構えることなく、無防備に『怨み』や『呪い』を身に受けることこそ、罪を担う第一歩だと思う。

案内してくれた中国の女性は、最後に思い出したように言った。『ああ、もうひとつ、私の同僚が、教えてくれた日本語があったわ、それはね、「ばきあろー」』。ああ、それこそ最もポピュラーな日本語。中国人も韓国人もシンガポール人も、みんな知っている日本語なのである。（知）

■■■■■■■■■ おしらせ

〈サロン・あべの〉五月の出会い

日時　平成元年五月二〇日（土）

行先　堺市大仙公園

オランダフェスティバル

ダッハ らんど

会費　一〇〇〇円（入場料・昼食代含）

集合場所　堺市大仙公園「ダッハらんど」メインエントランス入口前

集合時間　現地　午前一〇時

交通　JR阪和線「百舌鳥」駅下車

申込み　五月五日（金）まで。

申込み先　TEL・〇六－六九一－一〇二八

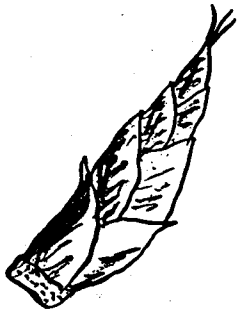
（冨田　慶子）

○お申込みの方には、後日詳しい連絡をします。又、西田辺よりの送迎、会場での車イス等必要な方は、お申込みの時にお知らせ下さい。尚、雨天の場合は中止します。

THE DEAF MUTE

23

旭　純子



ろうあ運動の現況

二、全国的な動き

昭和五十二年、旭川において開かれた「第二十六回全国ろうあ者大会」では次の四つの要求が決議された。

1、聴覚言語障害者総合センターの建設

2、手話通訳制度の確立

3、道路交通法八十八条の改正

4、民法十一条の改正

このうち、ろう・盲を準禁治産者とする条文の削除は五十四年に可決、五十五年から施行されている。

昭和五十六年、香川県で開催された「第三十回全国ろうあ者大会」では「国際障害者年にあたっての十ケ年行動計画」という特別決議がなされた。この内容には本部事務所の拡充や中央聴言センター、手話研究所の設立福祉施設の設立といった連盟施設の整備のほか、第十五回世界ろう者スポーツ大会日本招致、国際会議への大衆的参加、世界競技大会への役員選手団の派遣などの国際交流や出版事業の拡充、文化芸能活動の推進・プロ劇団の結成、国内スポーツ活動の推進、また全通研との統一運動の発展、障害者運動への全面参加、組織拡大の具体的な目標を作ることや手話通訳制度の確立など障害者と健聴者による共同活動の推進があげられている。

この計画でわかるように、ろうあ運動は再び新しい展開をみせている。それはろうあ者の権利追求と獲得のみならず、通訳者との連帯運動、ひいては障害者運動としての拡大であり、さらに国内だけでなく、国際的連帯に基づいたろうあ運動の展開を意味している。

なんとかしてくれ

秋野　富美子

地下鉄にスロープを

私は、両股関節症で両松葉杖を使用している障害者です。

三七、八年も続いた手術後の後遺症であった足の麻痺も大分回復に向かってきたので、最近難波の方へパートで勤める様になりました。

毎日の通勤途中で感じる事は、地下鉄に乗るにも、地下鉄からバスに乗り継ぐにも、身体障害者にとって何と不便なんだろうと思った事です。昇りのエスカレーターは有りますが、何故降りのエスカレーターは作っていただけないのでしょうか。

難波の駅にはエレベーターが設けられていますが、私は最近迄それを知りませんでした。障害者は人ごみに出ると足元に全神経を集中し、人にぶつからないように気を付けて歩いています。エレベーターの標識は、高い所に一ヶ所あるだけです。だから最初は何も知らずに階段を昇って通勤していました。

身体障害者にとってエレベーターは非常に有難いものですから、障害者の目線の位置に少なくとも二つ以上の表示は欲しいと思います。そして、車椅子の障害者も大いに地下鉄を利用出来るようにエレベーターと組み合わせてスロープを作っていただければ、どんなに良くなることでしょう。

バカヤロー！

浜本　浩喜

みなさん、こんにちは。
私は、先日新たにメンバーとして、加わりました浜本浩喜です。
今回は、私の経験した、貴重な体験を聞いて、いただきたいと思います。
それは、忘れもしない3月11日の夜のことです。私は前日近くの、レンタルビデオからビデオを借りていたので、返しに行った帰り道のこと、あと2、300m前方に近ずいたときです。
突然、後ろから中学生から、高校生ぐらいの男の子が「ねえ、僕、太田って言うけど、覚えてる、前にあったことあるやろ」と、声をかけてきたのです。
私は、そういわれて、立ち止まったものの、太田なんて名前は、心当りがなかったので、一瞬考え込んで「いやあ」と、返事をして隙を見せた瞬間、車椅子のアームレストと膝の間に挟んでおいたセカンドバックを抜き取っていったのです。
そうです。私は引ったくりにあったのです。その瞬間は何が何だか、訳が分からず思わず、大声を上げて犯人のあとを追ったのですが、生憎、私は電動車椅子なので、追い付くわけもなく、すぐに犯人を見失ってしまいました。
仕方なく家に戻り、110番しました。まもなく、数人の警官がやって来て、現場検証をしたり、事情聴取をしました。
全てが私にとって初めての出来事で、まるで、狐につままれているような不思議な気持になり、自分の置かれている状況がとても信じられませんでした。
バックの中には現金の入った財布をはじめ、私の全ての貴重品が入っていました。
なかでも、特に大切なものは、100件以上の知人の住所が入った、電子手帳と私が今、思いを寄せている女性からの手紙が入っていたのです。この二つだけは、二度と、取り返しのつかないものです。
ともあれ、こんな事があってよいのでしょうか？私達のような障害をもった弱者を狙うなんて、とても信じられません。
そりゃ、犯罪っていうのはそういうものかもしれませんが、そんなことができるという、人間が居るという世の中のあり方自体が何か、間違っていると思います。
また、何かの機会があれば、皆さんとこのことを話し合いたいと思います。
最後に言いたいことは、犯人にむかって「バカヤロー！！！」と・・・

＊ボランティアのつどい＊

ボランティア活動をされている方々と、ボランティアに関心を持っている方々との学習と交流の場である「ボランティアのつどい」が、今年度最後の例会として平成元年三月二五日（土）午後一時三〇分～四時育徳コミュニティーセンター二階研修室に於て、開催された。
この日、平成元年度の毎月の例会内容とその世話人さんについて話し合われ、今年度の世話人代表には松本孝氏が選ばれた。
サロンより二名（冨田・原田）参加した。

二重に見える話 □3□

独眼竜　菊正宗

くう　ねる　あそぶ

入院最初のメニューは看護婦さんの問診。

Q　生年月日は。

A　「――――」

Q　家族構成。

A　「――――」

Q　家の構造は。

マンションですか、木造ですか。住宅街ですか、工場地帯ですか。

A　「――――」

Q　複視になった日。その様子。病状の進み具合。

A　「――――」

Q　生れてこのかた患った病気。

A　「――――」

Q　血縁者のなかで心臓疾患の人はいますか。早死された人があればその病名を教えてください。

A　「――――」

Q　あなたの子供の健康状態はどうですか。

A　「――――」

Q　起床、就寝の時刻とその間の生活内容、生活のリズムについて。

A　「――――」

Q　尿・便は一日何回？

A　「――――」

Q　入浴の回数

A　「――――」

Q　食べもの、好き嫌い。食事の量は多い方ですか。

A　「――――」

Q　たばこは喫いますか。お酒はどうですか。

A　「――――」

まだまだ続きます。

Q　趣味は

A　「くう　ねる　あそぶ」といおうとしたが井上陽水ののりをわかってくれそうな看護婦さんでないのでやめた。

Q　病院、医師、看護婦に希望することがあれば…

A　「入って早々　そんなこと聞かんと退院のときに聞いてくれたらええのに」ともいえず

「はぁ、いや、別に何も」

編集後記

＜サロン・あべの＞のことしのメインテーマは「コミュニケーション」

えてして、ばらばらに生きるようになってしまった昨今、人と人との交流やふれあいが、どれだけ大切にされなければならないものか改めて痛感する。その「場」を＜サロン・あべの＞の例会に、あるいは本紙に求めて、人と知り合い、交りを深めていただければと思う。（石）

＜サロン・あべの＞第３４号
発行日　平成　元年　４月１５日（土）
発行・編集＜サロン・あべの＞運営委員会
［大阪市阿倍野区阪南町6-3-26
電話(06)691-1028冨田慶子］
印　刷　セルフ社　電話（06)691-2365
［阿倍野区西田辺２－２－１０
グレース鶴ヶ丘１０１号］
定価　￥６２．